

戦隊レッド、牛の敵幹部に捕まり屈し
て種を残される

2026

•

9

•

23

目次

第
01
話

第
02
話

第01話

「五色戦隊レッド、焰！ 正義は、自分の足で立つ！」

名乗りの途中で、商店街の防災スピーカーが白いノイズを吐いた。

二十時十七分。

敷石を割って這い出した魔物が、ドラッグストアの自動ドアを片腕で引き抜いている。

俺はその前に、一人で立っていた。

耳の中の隊の通信は、三分前から切れたままだ。

五色戦隊のレッド、焰。二十三歳。

体は、どこを取っても男のものだ。

違うのは股だけで、そこは生まれつき女の形をしている。

「レッド、こっち！」

逃げ遅れた店員が、シャッターの前で腰を抜かしていた。

「走れ。ここは俺が引き受ける」

店員は自分の膝を叩き、角の向こうへ転がるように消えた。

街灯の影で、三脚を膝の高さに畳んだ男がカメラを構えている。

透。隊が雇っている民間の記録係だ。

俺の出撃には、必ず後ろから付いてくる。

「透、もつと離れろ！」

「ここなら、逃げる人の顔も入ります」

「……勝手にしろ」

魔物の腕が振り下ろされた。

俺は拳で受け、タイルを蹴って横へ滑った。

市民の携帯が、あちこちから俺に向いている。

配信の画面に、赤いマスクがいくつも並んでいた。

「いい名乗りだったね、レッド」

スピーカーのノイズの奥から、低い声がした。

魔物の後ろ、傾いた看板の上に、男が一人腰かけている。

頭に、牛の角が二本。

顔は人のものだ。

俺より頭ひとつ大きく、肩は俺の倍ほど厚い。

「……誰だ」

「剛。この子を送った者だよ」

剛は魔物の背中を顎で指した。

「通信を切ったのも僕だ。君の仲間には、少し遅れてもらった」

「見物なら帰れ」

「今夜は、君だけを見に来たんだ。跪く前の名乗りが、いちばん甘いからね」

「気色悪い」

俺はベルトの側面に手を当てた。

ロックが、手のひらの下で熱を持つ。

このロックは、俺の体が敵だと判断した相手を弾く。

だから変身している間の俺には、魔物の爪も通らない。

「レッドフラッシュ！」

赤い光が、魔物の胸を撃ち抜いた。

巨体が膝から崩れ、黒い煙になって通りを埋める。

角の向こうから、歓声が上がった。

俺は拳を下ろし、いつもの癖で空を見上げた。

仲間の光は、まだ屋根の上に来ていない。

——その一拍に、黒い縄が手首に巻き付いた。

煙の中から、縄が引いた。

踵が敷石から浮き、体ごと横へ持っていかれる。

背中が、閉まったシャッターに叩きつけられた。

店と店の隙間の、細い路地だった。

表の通りとは、角ひとつで隔てられている。

縄は俺の両手首を頭の上でまとめ、シャッターの取っ手に括りつけていた。

剛は目の前にいる。

息が額にかかる距離だ。

「ほどけ」

「暴れると、肩が抜けるよ」

剛は、俺の手首の縄を指で一度だけ弾いた。

「煙が晴れるまで、しばらくかかる。記録係の彼は、表で煙を撮っているよ」

「透に手を出したら、殺す」

「彼には興味がないな。僕が欲しいのは、君の膝だけだ」

剛の掌が、俺の胸に乗った。

スーツ越しに、硬い胸板を撫で下ろされる。

「いい胸だね。鍛えてある」

「触んな」

「でも、ここだけは柔らかい」

親指が、スーツ越しに乳首を探り当てた。

グリ。

「ッ……」

張りつめた胸板の上で、乳首だけが尖っていく。

剛は爪の先で、そこを二度、三度と弾いた。

「ン、ク……っ」

「声を殺すんだね。偉いな。表には、まだ君を応援している人たちがいる」

角の向こうから、「レッド！」と呼ぶ声が聞こえた。

俺は奥歯を噛んで、声を喉の奥へ押し戻した。

掌が、腹を滑って下りていく。

スーツの股のところで、指が止まった。

「ここは、どうなっているのかな」

ビリ。

剛の爪が、変身スーツを股の縫い目から裂いた。

路地の夜気が、剥き出しになったまんこに触れる。

「やめろ……！」

「ああ」

剛が、低く笑った。

「濡れてる」

指の腹が、割れ目をなぞった。

ヌル、と滑る。

自分でも分かるくらい、そこはぐっしよりと濡れていた。

「違う。戦ったあとの、汗だ……」

「汗は、こんなふうに糸を引かないよ」

剛は指を離し、俺の目の前で開いてみせた。

指と指の間に、愛液が糸を引いていた。

「見てごらん。君のまんこは、僕の縄が気に入ったらしい」

「黙れ……っ」

「口を塞ぎたいなら、蹴ればいい。自分の足で立つんだろう」

俺は膝を上げかけた。

その膝の内側に、剛の手が差し込まれた。

太腿を押し開かれ、片脚をシャッターに縫い止められる。

グチュ。

中指が、一気に根元まで入ってきた。

「ア、ッ……！」

「狭いね。でも、奥はちゃんと吸いついてくる」

「抜け、抜けって……ッ」

「まだ入り口を撫でただけだよ。……ほら、もう一本」

グチュ、グチュ。

二本目が、狭い入り口をこじ開けて入ってきた。

中で指が曲がり、腹の側の壁を擦り上げる。

「ア、ア、ア……ッ、そこ、ア」

「ここか。ここを押すと、君の腰は勝手に前へ出る」

剛の言った通り、腰が指を追いかけて前に出た。

止めようとしても、止まらない。

親指が、上のほうのクリを捏ね始めた。

「ヒ、ッ——」

グチュ、グチュ、グチュ。

中の二本と、外の親指が、同じ速さで動く。

濡れた音が、路地の壁に跳ね返った。

「聞こえるかい。君のまんこが鳴いている」

「言う、な……ア、ン、ア」

表で、また歓声が上がった。

「レッドはどこ行った？」

「煙の中じゃないか」

「レッド、ありがとう！」

市民の声が、すぐそこで俺を呼んでいる。

その声が聞こえるたびに、中が指をきつく締めつけた。

「ほら、締まった。呼ばれると締まるんだね、君は」

「ちが、ア、ア、ちが、う……ッ」

「ほら、また。レッド、と聞こえるたびに、きゅっとなる」

剛は指を抜かずに、膝を折った。

俺の股の前へ、角の生えた頭が下りていく。

見下ろすと、剛が敷石に膝をついていた。

「……お前、が」

「うん。先に跪いたのは、僕のほうだね」

剛は、裂けたスーツの間に顔を埋めた。

ジュル。

舌が、クリを下から舐め上げた。

「アアツ、ア、や、ア——ッ」

指は、中で動き続けている。

舌は外で、尖った先を吸い上げる。

ジュ、ジュル、チュ。

膝が笑い出した。

縛られた手首で、シャツターの取っ手にぶら下がるしかなかった。

「イ、く、から、顔、どけ、ろ……ッ」

剛は答えなかった。

代わりに、中の指が一番奥の壁を強く押し上げた。

「ア、ア、アアア——ッ！」

腰が跳ねた。

中が、剛の指を繰り返して食い締める。

溢れた愛液が、剛の顎を伝って敷石に落ちた。

「……ハ、ツ、ハ……」

「いい声だった。表の歓声より、ずっといい」

剛は顔を上げ、濡れた口元を親指で拭った。

指は、まだ中に入ったままだ。

「抜け。もう、いっただろ」

「一度目はね」

グチュ。

指が、また動き始めた。

いったばかりで膨らんだ中を、今度は速く擦られる。

「ア、待、て、今、ア、ア、だめ、だ、って……！」

「今の君は、どこを触っても鳴くね」

「ふぎけ、ア、ン、んな、ア、ア、さっきイったばっか、なに、なんで、また、同じとこ、ア、そこ、ばっかり、お前、ほんと、しつこい、ア、ア、アア……ッ」

「しつこいのは、君のまんこのほうだよ。僕の指を放さない」
剛は立ち上がった。

指を中に入れたまま、もう片方の手でスーツの前を開く。

硬くなったちんぽが、俺の腿に押し当てられた。

太い。

腿に当たっているだけで、熱と重さが分かる。

「……それ、は」

「今夜は入れない。君がこれを欲しがる顔を、先に見ておきたいんだ」

剛は、濡れたクリにちんぽの先を擦りつけた。

ヌチ、ヌチ。

指は中を抉ったまま、亀頭が外の一番弱いところを押し潰す。

「ア、ア、ア、ヒ、ア——」

「欲しいかい」

「いら、ない……ッ」

「口は拒んでいるね。まんこは、先っぽに吸いついてくる」

ヌチュ。

亀頭が、入り口に半分だけ沈んだ。

そこで止まる。

入ってこない。

「ア……」

「今、腰が追いかけてきたね」

「知る、か……っ」

剛は亀頭を引き、また指だけで奥を突き上げた。

グチュン。

「アアアッ！」

二度目は、一度目より深く来た。

足先まで痺れて、背中のシャッターがガシャンと鳴った。
表の声が、一瞬だけ止んだ。

「今、何か鳴らなかった？」

「路地の方か？」

俺は唇を噛み切りそうなくらい噛んで、声を殺した。

中はまだ、差し込まれた二本をひくひくと締めている。

剛は指を抜いた。

糸を引いた指を、俺の唇に押し当てて。

「今夜はここまで。煙が晴れる」

縄が、ほどけた。

手首の皮膚に、赤い線が一本残っていた。

「次は、君のほうから膝をつかせてあげる」

剛は路地の奥の暗がりへ下がり、そのまま消えた。

俺は震える指でベルトを押し、変身を解いた。

スーツが光になって散る。

裂け目ごと、跡形もなく消えた。

残ったのは、濡れた下着と、手首の線だけだ。

「焰さん！」

煙の晴れた路地の入り口に、透が立っていた。

カメラを胸の前に抱えている。

「縄で引かれるところまでは撮れました。そこから先は、煙で何も」

「……逃げた」

俺は嘘をついた。

透の目が、俺の手首に落ちた。

「手首、赤いです」

「縄の跡だ」

「映像にも残っています。いいですか」

「消すな。消したら、何かあったみたいに見える」

耳の通信が、急に生き返った。

『焰、応答しろ！ 単独で前に出たのか！』

司令の声だった。

「魔物は撃退。敵の幹部と接触した。名前は剛、牛の角」

『負傷は』

「手首に擦り傷。以上」

『帰還しろ。報告書は明日の朝でいい』

通信が切れた。

商店街のスピーカーが、最後にもう一度だけノイズを吐いた。

録音された剛の声が、通りの端から端まで同じ一言を流している。

『レッド。次は、自分から跪いて名乗れ』

透がカメラを持ち上げ、その声を拾った。

俺の太腿の内側を、まだ乾いていない愛液が一筋伝い落ちた。

第02話

翌日の昼。河川敷。

『焰、単独で出るな。イエローとグリーンが十分に着く』

「待ってたら、グラウンドの連中が潰れる」

堤防の下グラウンドで、社会人の野球チームが魔物に囲まれていた。

大人が十人ほど、ベンチの陰に固まっている。

魔物は、昨夜のものより小さい。

三体いる。

『手首の具合はどうだ』

「拳は握れる」

俺は通信を切り、堤防を駆け下りた。

背中のずつと後ろで、透の足音がついてくる。

一体目を拳で碎き、二体目を蹴り飛ばした。

三体目が、橋の下へ逃げ込む。

選手たちが、ベンチから土手へ駆け上がっていく。

「全員、上へ！ 振り返るな！」

最後の一人が堤防を越えたのを見てから、俺は橋の下へ入った。

橋脚の影に、剛が立っていた。

三体目の魔物は、剛の足元で煙になって消えるところだった。

「来たね、レッド」

「昨日の続きか」

「そうだよ。君の手首も、まだ僕の縄を覚えている」

俺は一步で間合いを詰め、ベルトの側面を叩いた。

「レッドフラッシュ！」

赤い光が、剛の胸に正面から当たった。

音が遅れて橋桁に響く。

剛の胸の鎧が裂け、白い煙が上がった。

それでも、剛の膝は地面に着かなかった。

「……効いてないのか」

「胸が焼けたよ。久しぶりにね」

剛の手から、縄が飛んだ。

今日は、両手首が同時に巻かれた。

縄はそのまま橋脚の鉄の輪に通され、俺の腕を頭の上へ吊り上げた。

俺が立っているのは、護岸のコンクリートの段の上だ。

剛はその一段下に立っている。

段の高さは、ちょうど俺の腰の位置だった。

堤防の上で、透がカメラを構えているのが見えた。

「彼からは、君の胸から上しか見えない」

剛が言った。

「この段の縁が、腰から下を隠してくれる。腕を上げた君は、縄と戦っているヒーローに見えるよ」

「……何をする気だ」

「昨日の路地の、続きさ。今日は彼の前でね」

段の下から、大きな手が俺の腿を掴んだ。

ビリ。

スーツの股が、また裂かれた。

「透が、いる……っ」

「彼に映っているのは、胸から上だけだ。顔はマスクで、腕は上がっている。立派なものだよ」

指が、割れ目を下から撫で上げた。

もう濡れていた。

昨夜の指の感触が、そこにまだ残っているみたいだった。

「縄を巻いただけで、これかい」

「うる、さい……」

「背筋を伸ばして。彼のカメラの中の君は、まだ負けていないんだから」

剛は段の下で、スーツの前を開いた。

ちんぽが、俺のまんこの割れ目にずるりと押し当てられた。
入ってはいない。

割れ目の上を、根元から先まで擦られる。

ヌチュ、ヌチュ。

「ア……ッ、ン」

「声は、上に出すと彼に届く。気をつけて」

太い幹が、濡れた割れ目を押し開くように前後する。
亀頭が通るたびに、クリがごりごりと押し潰された。

「ン、ン、フ、ッ……」

俺は奥歯を噛み締め、真っ直ぐ前を向いた。

カメラのレンズが、日差しを跳ね返している。

透には、橋の下で縄に吊られて耐えているレッドが映っているはずだ。

腰から下で何をされているかは、映らない。

「いいね。マスク越しでも分かるよ。歯を食いしばっている」

ヌチュ、ヌチュ、ヌチュ。

擦られる速さが上がった。

剛の腰が、段の下で俺の腿を打つ。

パン、パン、と乾いた音がして、それが橋桁に跳ねた。

「こ、んな、響いたら……っ」

「川の流れて消える。君の喘ぎは、消えないけどね」

剛は片手で幹を握り、亀頭で入り口だけを突いた。

ヌプ。

先が少しだけ沈んで、すぐ抜ける。

ヌプ。

また沈んで、抜ける。

「ア、ア、や、そこ、ア……」

「入れてほしいかい」

「誰、が……ッ」

「入り口が、ぱくぱくしている。僕の先っぱを、食べようとしてるよ」

剛の空いた手が、裂け目から中へ指を二本押し込んだ。

グチュ。

「アアッ——」

声が、上に抜けた。

堤防の上で、透が顔を上げたのが見えた。

「今のは、届いたかもしれないね」

「く、そ……ッ」

「大丈夫。縄が肩に食い込んで、痛がっている声に聞こえるよ」

グチュ、グチュ、グチュ。

指が中を掻き回し、亀頭が外のクリを擦る。

昨夜覚えさせられた場所を、的確に押し上げられる。

腕を吊られているから、腰を引くこともできない。

「ア、ア、だめ、だ、イ、く、透が、見てる、のに、ア、なん
で、こんな、昨日も、今日も、お前、ばっかり、ア、ア、そこ、押
すな、押すなって、言って、ア、ア、アア——ッ！」

腰が跳ねた。

段の下で、中が二本の指をぎゅうぎゅうに締め上げる。

溢れた愛液が、剛の手首まで伝った。

上半身だけは、動かさなかった。

カメラの中の俺は、きつと縄に耐えて立っている。

「上手だ。上は、一度も揺れなかった」

剛は指を抜かずに、幹を握る手を速めた。

グチュ、グチュ。

イったばかりの中を、指がまた掻き回す。

「ア、ア、今、だめ、ア、ア」

「もう一度。今度は、僕と一緒に」

亀頭が、クリの上で細かく揺すられた。

指が、奥の壁を押し上げたまま動かなくなる。

押されたまま、外だけを擦られる。

「ヒ、ア、ア、それ、ア、おかし、く、なる……ッ」

「構わないよ。上は、ヒーローのままだ」

「ア、ア、ア、アアア——ッ！」

二度目は、一度目より長く続いた。

吊られた腕が、縄をぎしぎしと鳴らす。

「僕も、出すよ」

「……な、か、には」

「中は、今日じゃない」

ドピュ。

熱い精液が、俺の腿の内側に叩きつけられた。

ドク、ドク。

剛の精液が、裂けたスーツの縁から太腿を伝って流れ落ちる。
段のコンクリートに、白い筋が垂れた。

「……ハ、ッ……」

剛は指を抜いた。

縄が、手首から滑り落ちた。

赤い線が、昨夜の一本に重なって二本になっていた。

「次は、ロックを外しに行くよ」

剛は俺の耳元で言った。

「そのロックは、君の体が敵だと思おう相手を弾く。二日続けて僕の指でいった体が、まだ僕を敵だと思えるかな」

剛は橋脚の影へ下がり、川面に落ちる暗がりの中へ消えた。

俺は変身を解いた。

腿を伝っていた精液ごと、スーツが光になって散った。

下着の中だけが、ぬるついたまま残った。

堤防から、透が駆け下りてきた。

「焰さん、縄は」

「切って逃げられた」

「必殺は、胸に当たっていました。映像に残っています」

透はカメラの画面を俺に向けた。

赤い光が剛の胸に当たる一瞬が、止まって映っている。

その次のコマは、縄に両腕を吊られた俺だ。

腰から下は、護岸の段の縁で切れていた。

「……下は、映ってないな」

「段で切れています。何かありましたか」

「何もない」

透は、俺の手首を見た。

「線が、二本になっていますね」

「隊のアーカイブには、全部入れるのか」

「私の手元のものは、一秒も切りません。公開する部分を選ぶのは広報です」

その夜、広報が隊の公式チャンネルに動画を上げた。

題は『レッド単独出撃、敵幹部に必殺命中』。

サムネイルは、光が剛の胸に当たった一瞬だった。

縄のところは、切られていた。

コメント欄は、「レッド最強」で埋まっていた。

夜中の二時に、俺の携帯が震えた。

知らない番号から、動画が一本届いていた。

再生すると、低いところから見上げた画が映った。

護岸の段の下だ。

裂けたスーツと、濡れた割れ目と、そこを擦る剛のちんぽが、川の照り返しの中で動いていた。

音も入っていた。

『ア、ア、だめ、だ、イ、く、透が、見てる、のに』

動画の下に、一行だけ文があった。

『川に小さな目をひとつ置いておいた。三日後の夜、北の廃倉庫へ。来なければ、下半分を街に流す』

俺は司令に、手首の治療で三日休むと送った。

透には、一行だけ送った。

『明日から休む。ベルトは自分で直す』

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名 戦隊レッド、牛の敵幹部に捕まり屈して種を残される

サークル もふもふといっしょ！

発行日 2026・9・23

レーティング R18